救世叢書

# 神

將山室軍平著

救世軍出版及供給部

特265
412
×複写

始

412.

救世叢書

# 神

中將　山室軍平著

山室武甫氏寄贈本

基督教は神を信ずる宗教である。天地萬物を造り、又之を支配し給ふ眞の神を信ずる宗教である。と言へばとて、天地萬物が初から、私共が全く目に見るやうな風に造られたか、又は幾萬年、幾十萬年の間に、段々こんなことになつたかは、どちらでもかまはない。兎も角も私共が現在目に見るやうな、天地萬物が出來たのは、神の大なる智慧と能力とによるものだといふのが、基督教の信仰である。何れ其の神は、目に見えない、所謂靈なる神にて、

智慧に富み、能力に富み、義しいことを好み、不義を憎み給ふ御方で、又愛と憐憫とに滿ちて居給ふものに相違ない。基督は其の神のことを、「天に在す我等の父」と敎へ給うた。「天に在す」とは、言ひ換れば「靈なる神」といふことである。「我等の父」とは、言ひ換れば「愛なる神」といふことにして愛なる神」といふよりも、簡單明瞭に、神を說き明す語はない。しかし「靈にして愛なる神」というただけでは、少し理窟つぽい言ひ方だといふなら、道理はその儘保存して、其の上に溫かい人情味を附加へ、之を異る語で言ひあらはして、神は「天に在す我等の父」であるといへば、それでこそ道理もつんで居り、人情味も豐な、これほど行屆いた御敎といふはないのである。



□

然らば目にも見えない神が存在し給ふと信じ、しかも其の神は「靈にして愛なる神」であるとか、又は「天に在す我等の父」であるとかいふことは、どうして信じられるか。其のわけが聞きたいと言はるるであらうか。それに就いて考へて見たいことが、四つ五つある。

第一、天地自然は神の存在を示すものである。此の不思議なる天地自然が盲目の勢力によつて、偶然に出來たものとしては、餘りに念が入り過ぎて居る。此うした行屆いた天地宇宙は、どうしても、大きな智慧と能力とに富ん

だお方が、意味あつてお造りになつたものでなくてはならない。昔の支那人は「天に燦爛たる文章あり」といつて、天の星の不思議な配列を讃美した。ヤングといふ詩人は又、「敬虔ならざる天文學者は狂人である」といひ、此の驚くべき日月星辰のことを研究する天文學者でありながら、神を信じないといふなら、正氣の沙汰ではないと說いたものである。傳說によれば、昔アブラハムは故あつて、山の洞穴に隱れて居つた際、一夜外に出て、幾千幾萬とも知れない星が、天にきらめく有樣を眺め、いかにも尊く勿體なく覺え、それらの星を神として拜んで居る處へ、大きな月が現れた。此は星よりも大き く、且明るい、拜むなら此の方を拜むのが本當かも知れないと、今度はよつ



ひて、月を拜んで居るうち、到頭夜が明けて、太陽が東の天に昇つた。此は又月よりも大きくて、明るく、其の上に暖い。どうせ拜むなら之を拜んだ方が本當であるかも知れないと、其の日は一日、太陽を拜んでゐた處が、其のうちに日がくれて、太陽が西の山の端に隱れた。そこでアブラハムが考へたことは、こんなに太陽を拜んで見たところで、をりをり、出たり、引込んだりせられたのでは甚だ心元ない。何か別に出もせず、引込みもせず、斷えず私共を守り助け給ふお方がなくてはならない筈であると、それから種々思案をこらした結果、終に星でも、月でも、日でもなく、それらを殘らず造つて、之を守り支へ給ふ、ただひとりの眞の神を見つけ、之を信仰するに至つたと

いふのである。

詩篇に「見よ、我は畏るべく、くすしく造られたり」（詩一三九・一四）とあり、世に珍らしく、不思議なものがあるとすれば、私共人間くらゐ、靈妙不思議に出來た生物はない。ソクラテスが弟子をつれて外を歩いて居る時、其の中の一人が、一つの大層巧妙に出來た肖像を見つけ、「先生、此は立派な肖像であります、まるで活きた人間のやうではありませんゐ、一體どういふ人の作でせうか」と尋ねると。ソクラテスは答へて、「いかにも然うだ、此は成程よく出來て居る。決して凡人の作ではあるまい。しかし乍ら石に刻んだ肖像が、聊か活きた人間に似て居るからというてさへ、其の作者は誰かと吟味するく



らゐなら、まして活きた人間其のものを眺めて、此は非常に立派な、行屆いた作である。一體どなたの御手に成つたものであらうかと、萬物の造主なる神を尋ぬべき筈ではないか」と、教へられたといふ話がある。

五月の節句の前日、肴屋が「鯛や、鯛や」というて賣つて來ると、反對の方角から一人の男の子が、「柏の葉、柏の葉」というて、木の葉を束ねたのを賣つて來た。明日は五月の五日だから、柏餅を作る爲に入用な、柏の葉をうるものと見受けられた。肴屋は其の少年を呼び留めて、柏の葉の値段をたづね、「高い、半値に負けろ」といふと、「半値では損が行く」と答へた。「損がゆくといふことがあるか、木の葉は山から取つて來た丈で、もとのかゝつてゐな

い、無料の品ではないか」といふと。「此の木の葉が無料なら、お前さんの肴だつて、もとは無料だらう」と言ひ返した。「肴が無料といふことがあるか、ちやんと問屋に金を拂うて、買出したのではないか」といふと。「そんなら、問屋は誰に金を拂うた。」「問屋は漁夫に拂うた。」「その漁夫はどこへ金を拂うた。」「漁夫かい、漁夫は金を拂はない、海から無料で肴をとつたのだ。」「それ御覽、柏の葉を山から無料とつて來たといふなら、お前さんの肴だつて、海から無料で取つて來たのではないか」というたさうである。さういふ考へ方をして見ると、私共が代價を拂うて求めたと思ふ肴も、實は其の運賃を拂うた丈で、肴は無料でどなたからか、施してもらうて居たのである。年が



年中、運賃だけ拂へば好いことにして、日本國中の人々に、肴を食べさせておく親切なお方は、一體どなたであらう。こんな風に考へると、私共はどうしても行屆いた、惠ある眞の神の存在を認めざるを得ないのである。

西洋の諺に「自然は第二の聖書である」と申し、聖書が神に就いて敎へる如く、自然も亦神のことを敎へてゐる。或は「自然は神の衣裳である」とも申し、衣裳を見て、之を着用する人を推察する如く、私共は又自然を見て、其の奥にひそみ給ふ神を想像することが出來る。私共は天地自然を通じて、神を知ることが出來るのである。

聖書に「もろもろの天は神の榮光をあらはし、大空は其の御手の業を示す。」

（詩一九・一）又「夫れ神の見るべからざる永遠の能力と、神性とは、造られたる物により、世の始より悟り得て、明かに見るべければ、彼等言ひのがるる術なし。」（ロマ一・二〇）などとあるのは、その事である。

□

第二、歴史は神の存在を示すものである。善人、悪人、智者、不智者、種種なる人物が出て來て、思ひ思ひのことを行うて居るやうだが、それら凡ての上を大まとめに、まとめる能力があつて、つまり善事は世に行はれる、眞理は最後の勝利者だといふことに成行くのは、是神が人間のなす事を、斷えず審いて居給ふからでなくてはならぬ。昔の支那人の言に「人多き時は天に勝つ、天定まつて後人に勝つ」というてある。つまり多人數寄つて、一時は無理を押しとほすことが出來たやうに見えても、間もなく必ず失敗する。人が多數をたのんで天に勝つたつもりでも、やがて天は必ず人に勝つものだといふ意味である。昔話に、蝶螺が海の底で大言を吐き、「あの鯛だの、平目だのいふものは、慣れな奴らである。なまやさしい姿をして居るから、何ぞの時には直に禍を身に受ける。しかし俺は堅固な殼で身を堅めて居るから、そこへ行けば安心である、大丈夫である。」というて、威張つて居ると、忽ちばさつと、網をうつ音がした。さあ、こんな時にこそといふので、蝶螺は急に蓋をしめ、「これで大丈夫だ、俺は心配ないけれども、あの鯛や平目はどう

なつたか知らん」と、數時間の後蓋をあけて、首を出して見ると、少し勝手がちがふ樣である。よくよく注意して見ると、こはいかに、鯛や平目と竝べて、蝶螺も同じく肴屋の店先に、「一つ幾ら」といふ値段書と共に、晒されて居つたといふことである。丁度そんな風に、神は善人も、惡人も、權力のある者も、權力のない者も、金持も、貧乏人も、學者も、無學者も、のこらず大まとめに支配し給ふ。「天網恢々粗にして漏さず」といふのは、その意味ではないか。

或人の言に「歴史は審判なり」とあり、人間の歴史を見ると、つまり善惡正邪は、皆それぞれの審判を受けて居る。一寸目の先のことだけ見ると、伯



夷、叔齊の如く、義しい道を歩きながら、饑ゑて死んだ者もあり、大泥棒の盜跖の如く、惡を行ひながら天年を以て死んだ者もあり、「天道は是か非か」と疑はしめるやうなこともないではないが、それらは例外である。麥を播けば麥がとれ、米をまけば米がとれるやうに、つまり善には善の報があり、惡には惡の報がある。昔から異種異樣の人々が世に現れ、勝手放題な眞似をして去つて行つたやうだが、どこかに其の上を大まとめにまとめて居るお方があり、つまり正義は世に行はれ、眞理は最後の勝利者であるやうに導いてお出でなさる。手間はとるやうだが、それでも世の中は一歩一歩進んで、昔のやうな壓制や、暴虐は段々行はれなくなり、自由が認められ、平等が認められ、

博愛が認められ、戰爭を厭うて平和を慕ふやうになり、弱い者いぢめを止めて、平民、大衆の利益、幸福を考へらるるやうになりつつある。ヒフテが「正義は宇宙を主宰する」といひ、マシュー・アーノルドが「正義は歴史を支配する」というたのは、ここの道理を説いたものである。

ナポレオンは武力を以て歐羅巴の諸國をきりなびけ、自分一人で、氣儘の事をなし得るやうに思ひ込んだが、さうは行かなかつた。最後にウォタルーの大戰に先だち、彼は水も洩さないほど行屆いた作戰計畫を立てゝ、手配をしたにも拘らず、其の當日、いよいよこれから交戰といふ間際になつて、思はぬ大雨が降つて來た爲に、道路がぬかつて自由に砲車を動かすこと能はず、それが原因となつてナポレオン一敗地にまみれ、復起つことが出來なかつた。つまりナポレオンは、敵軍に負かされたのではなくて、思はぬ雨に負かされたのである。思はぬ雨を降らせ給うた神に逆らふことが、出來なかつたのである。卽ち「棘ある鞭を蹴るは難し」（使二六・一四）と、聖書にあるのも、思ひ合さるゝではないか。

しかし此の如きは唯、書物に名の殘るやうな、えらい人たちばかりのことでなく、私共の毎日の生活の上にも、往々人間以上に萬事をしろしめすお方があつて、それぞれの成敗をなし給ふことを感ぜらるる場合が少くない。或時一人の婦人があり、其の夫の困窮を見るに見かね、此の間結婚の際、親だ

の親戚だのから貰うて來た、簞笥に二竿の着物を、殘らず古着屋にうり、其の代金を夫に提供した。そんなことを誰も知るものはないと思うて居つた處、そのうち叔母が病死して、片身わけの時、簞笥に二竿の着物を送つて來られた。さうかと思ふと、今度は實母が病死せられ、復又片身わけの時、簞笥に二竿の着物を送つて來られたので、其の婦人は不思議に思うたのである。卽ち自分が夫の爲とて提供したのは、簞笥に二竿の着物であつたが、それをどこかに見て居つたお方でもあるのか、追々辨償して、終に簞笥に四竿迄も、着物を所有するやうにならせ給うた。此は全く、神のなさることに相違ない。その神を確實に知りたいものであると、しきりに尋ねて居る處へ、圖らず基督敎を聞き、目に見えない、貴き眞の神の在すことを敎へられ、これこそ今迄自分が知らずして求めた神に相違ないと、爾來極めて熱心なる基督者となつて、一生を過したのであつた。

そんなわけであるから、神の存在は歷史の上にあらはれて居る。或は人間萬事に行はるる神の御攝理の中に、あらはれて居るといふことが出來よう。

□

第三、次に人間の良心は、神の存在を敎へるものである。元來人は眞劍になると、神を呼ぶものである。又切迫つまると、人間以上のお方にすがりたい氣になるものである。ヘレン・ケラーは生れて十八九ヶ月の頃、大病にか

かり、治つて見たら、盲目で、つんぼで、唖になつて居つた。かくて音のない暗闇の世界に、七年間生き存へた後、或る親切な教師から、片手に林檎を握らせておいては、片手のてのひらに、林檎といふ字を書いて教へるといふ風にして、段々言語を教へられた。さては唇にさはつて人がもの言ふのを悟り、又自分でも其の眞似をして物を言ひ得るやうになつた。それから追々學問を勉強して、大學を卒業し、英、佛、獨の國語を語り、又ギリシヤ語を解するやうになり、難解な高等數學さへ堪能になつた。しかし神のことは、手でさはつて知るわけには行かないから、間違へて教へてはならないと、しばらく何にも言はないでおいて、或日有名なフイリップ・ブルックスといふ教師をたのみ、そのお話をしてもらうと、ヘレン・ケラーは、それを聞き終つて後に言うた。「ブルックス先生、私はそれを皆そつくり知つて居りました。唯そのお方を神と呼ぶことを、知らなかつたばかりであります」と。此の如く人の本心は神を教へるものである。又人が純眞になつた時には、いつでも上を仰いで、「天も照覽あれ」といふ氣分になり、何か眞實をこめて行はうとする時には、「天地神明に誓うて」といふ心持になるのが常の習である。之に反して、人が惡事を行ふ時には、何となく「そら畏ろしい」といふ感じがする。此の「そら畏ろしい」といふ感じがするのは、亦そのまま、天地を主宰し給ふ所の眞の神を畏れ敬ふ心に外ならない。古人が「良心の聲は神の聲なり」とい

ひ、又「良心は始には友人の如く忠告し、終には裁判家の如く刑の宣告をする」というたのも、皆人の良心が、自分以上の貴き神を敎ふることをいうたものである。良心は神の存在を語るものである。

□

第四、基督は神の存在を私共に敎へ示し給ふ。前に申上げた如く、自然と、歴史と、良心とは、こもごも神がなくてはならないことを私共に敎へる。しかし乍らそれでもまだ足りない處を、はつきりと、まるで手で觸れ、目で見る如く、私共に紹介する者は基督である。基督は神がいかなるお方かといふことを敎へて、神は「天に在す我等の父」であると告げ給うた。而して自分が先に立つて、其の父なる神を崇め、之に仕へ、其の思召のまにまに生活する者の模範を示し、果ては十字架の上に死んで迄も、神が人類を愛し給ふ愛の、いかばかりなるかを實地に示し給うた。諺に「子を見て親を知る」といふことがある如く、私共は基督を見て、天の父なる神を理解することが出來るのである。卽ち聖書に、「未だ神を見し者なし、唯父の懷に在す獨子の神のみ、之を顯し給へり。」(ヨハ一・一八)とあり。又お弟子の一人なるピリポが「主よ父を我等に示し給へ、さらば足れり」というたのに對し、基督が、「我かく久しく汝等と偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり。いかなれば我等に父を示せと言ふか」(ヨハ一四・八、九)と宣うたのは、全くこと

の事である。

ロマのバチガンの宮殿に、一つの名畫を天井に貼つたのがある。天井に貼つてあるのだから、仰向にならねば見えない。けれども長い時間、仰向になつて見つめてゐるのも苦しいから、其の部屋に殆んど一ぱいの大きな机をおき、机の上に大きな鏡を備付けられた。そこで天井裏の名畫を見る爲に仰向く必要がなくなつた。卽ち人々は其の鏡に映つた畫さへ見て居れば、天井の畫を其のまゝ賞美し得るからであつた。それと同じやうに、私共が上に向いて天の神を見出すに困難を覺えて居る時、神の御姿を其の儘私共に反射する基督があり、人間の世界に現れて、神の大切なる御旨を敎へ、其の御意を



行ひ、十字架に死んで迄も、神と人との間を執成して下されたお蔭で、私共は何のこだはりもなく、天の父を拜むことが出來る樣になつたのである。卽ち私共は基督を見ることによつて、神を知ることが出來るのである。

江原素六氏は、信仰篤く、人格高き、基督敎の紳士であつた。それ故床次竹次郎氏は言うて居られる。「江原翁の前に出ると、何となく頭が下つて、神は在るものだと感じました」と。江原翁にして既にさうであつたとすれば、まして基督に於てをやである。しかも私共が基督によつて神を知るやうになると、最早自然や、歷史や、良心を通じて神を知る以上に、極めて明確に、最も滿足に、之を知り奉ることが出來るのである。

□

第五、ついでに今一つ附加へて言へば、私共は自分の體驗によつて、神を知ることが出來る。私共は前にいふ如く、自然により、歴史により、良心によつて、神を知るのみならず、亦基督に敎へられ、導かれて、神が天の父であることを學び、之にお賴み申上げるやうになつて見ると、果して神から、種種、靈の上に、肉の上に、これ迄になない御惠と御助とを受けることが出來る。而してその結果、私共は神が存在し給ふ所ではない、實際活きて働いてゐ給ふ私共の父上であるのを、確實に體驗することが、出來るやうになる。昔ヨブは、神にむかひ、「我、汝の事を耳に聞き居たりしが、今は目を以て汝を見奉る」（ヨブ四二・五）といひ、パウロは、又「我、わが依賴む者を知る」（テモ後一・一二）と告白した。そこ迄行くと、私共の神に對する信仰は、最早大磐石の如く堅固である。それこそ何人も、何物も、搖がすことの出來ない、大丈夫なものとなるのである。

岡山孤兒院の石井十次君は、青年時代に「岩倉公刺殺すべし」といふ過激な文章を書いたのを、刑事巡査に拾はれ、自分では、まさか書いた通を實行する心算でもなかつたが、或は實行する心算かも知れぬといふ嫌疑で捕へられ、郷里の日向から薩摩に護送せられて、裁判をうけた。初の間は血氣の勇に任せ、しきりに獄中で亂暴などして居ると、或夜不思議な夢を見た。其の

夢によると、自分は罪もないのに捕へられて、警察から裁判所へと引張りまはされ、やがて無罪放免になるといふのであつた。翌朝その夢のことが氣にかかり、そんなことを考へながら、折柄讀みかかつた一冊の書物を取上げると、そこに、孟子の語を引用してあるのが、目にとまつた。其の句といふのは「天のまさに大任をこの人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓し、其の身を空乏にす云々」といふのであつた。つまり天が或人に、何か大事な役目を授くる前には、必ず先づ空腹い目をさせたり、骨折をさせたり、心配苦勞をさせたり、又は貧乏難儀に遭はするものだ、といふ意味の語であるから、石井君はそれを讀んで感奮した。「昨夜の夢といひ、今日の此の語といひ、恐らく天が私を鍛ひ上げて、何か世に益ある人物たらしめんとて、現に私を難儀苦勞の中に磨いて居らるるのかも知れない。若しさうなら、いたづらに亂暴して、みんなに迷惑をかけるなど、つまらんことである」と。それから後は、おとなしくして辛抱して居ると、間もなく夢で見た通り、無罪放免になつた。それから後、石井君は岡山の醫學校に入學の爲に同市に來り、そこで基督教を聞いて、ただひとりの眞の神の事を教へられると、直に成程とうなづいた。「さうだ、其の眞の神こそ、私をさまざまの難儀苦勞の中に、きたえて居らるるお方に相違ない。卽ち前におぼろげながら心付いて居つた天といふのは、此の眞の神のことにちが

ねあるまい」と。それから決心して、熱心なる基督者となり、珍らしい博愛家となつて、小學校の教科書にまで、載せらるるほどの人物となられたのである。

私共も神を信じ、之に仕へ、之に賴り、其の御助と御導とによつて歩むやうになると、爾來神の愛と惠とを、ありあり身に經驗することが出來る。最早道理や說明の沙汰ではなく、明かな事實、又體驗として神を知るのであるから、此の上寸分疑を容るる餘地がないほどの、確信に達することにもなるのである。

□



既に「天に在す我等の父」なる神を認め、其の存在を信じた以上、私共は、其の神に對してどういふ態度をとつたら可いかといふに、これには少くとも三つの大切な心得がある。

第一は、之を敬ひ尊ぶことである。神は天地宇宙を造つて、之を支配し給ひ、私共は其の御惠と御力とによつて、生き、働き、又存在を續くるものであつて見れば、私共が其の神を敬ひ崇むべきは、當然のことである。それも外部の儀式や、體裁で神を崇めるのではなく、心と眞とを以て之を尊敬し奉らねばならぬ必要がある。基督が、神は靈なれば、拜する者も靈と眞とを以て拜すべきなり」（ヨハ四・二四）と、仰せられたのは、そのわけである。

サンフランシスコの市外に、救世軍の孤児院がある。或時其の院長が一人の院兒にむかひ、「入口が大層汚いやうだから掃除をして來て下さい」と命令した。さうすると少年は、行つてちよこちよこと掃除をして來て、「ハイ、掃除をして參りました」といふた。「それでは今一つ、用事をたのまれてもらひたい。今度は院長さんの代りに、入口が奇麗になつてゐるか、どうか、見て來て下さい」といふと、少年は一寸考へて居つたが、やがて、「それではその前に今一度掃除をし直して參ります」といふたさうである。思ふに此の少年は前に掃除をしに行つた時、少年仲間の一人前くらゐの掃除はして來たのだけれど、院長さんの代りに行つて見るとなると、少年仲間で良いと見る標準とは、自から目安がちがうて來る故、それでその前に、今一遍、掃除をし直して參りますといふたのであらう。それと同じやうに、今時これくらゐに酒をのみ、これくらゐに不品行をなし、これくらゐに嘘をつくのは、世間一般の習はしであるなどといふ、そんな標準によつて、行動をしようものなら、私共はどんなことをしでかすか、知れないのである。しかし乍ら斯る場合に、院長さんではないが、神の目には、此の事をいかが御覽になるであらうかといふ、一等高い標準によつて判斷して、その行動をするやうになると、それこそ私共の世渡の仕方が一變するに相違ないのである。私共は此ういふ意味に於て、神を敬ひ尊ばねばならぬ。西郷南洲は「人を相手とせず、天を相手とせよ」

と言うて居る。私共は又何事をするにも、人を相手とせず、神を相手とし、神が善しと認め給ふやうな世渡をすることを、心がけねばならぬ。聖書に「エホバを畏るるによりて人、悪を離る」(箴一六・六)とあり、私共は悪を離れ、義しきを行ふことによつて、神を敬ひ、之を崇め奉らねばならぬ。

□

第二、私共は神の御助を求めねばならぬ。私共は罪を赦されん爲に神に祈らねばならぬ。新しき心を授けられん爲に、神の御助を求めねばならぬ。誘惑を凌ぐために、試煉に堪ゆる爲に、職分を行ふ爲に、他人を救に導く爲に、其の他自分のみならず、其の家族友人の爲に、いろいろと神に願ひ求めねばならぬ。私共は心配苦勞の多いものである。しかし乍ら神は、「患難の日に我を呼べ、我汝を援けん、而して汝我を崇むべし」(詩五〇・一五)と約束して居給ふ。私共は薄志弱行にして、兎角したいと思ふ善事が出來ず、反つてしたくもない惡事が出來て困るものである。しかし乍ら神は私共を助けて「弱きよりして强くせられ」(ヘブ一一・三四)しめ給ふのである。私共は力なくして、己が神から命ぜられた務を全うし兼ぬるものである。しかし乍ら基督は「我を忠實なる者として、此の務に任じ給ふ」(テモ前一・一三)としるしてある。

マルチン・ルーテルは一人で、反對者が雲の如く群がる中におどり込んだ。

しかも彼は詩篇の第四十六篇「神は我等の避所、又力なり、なやめる時のいと近き助なり」といふのを歌ひつつ、大膽に其の間に突進したのであつた。

私共も亦、神が私共の「いと近き助」であることを憶え、いかなる場合にも、其の御力に依頼むことを知らねばならぬ。

□

第三、私共は又神に一切を任せ奉らねばならぬ。兎角人は餘計な思ひ煩ひの爲に壽命を縮むるものである。又いたづらな煩悶苦慮の爲に、鬱陶しい、陰氣な毎日を過すことのみ多いものである。しかし乍ら神を信ずる者は、一切の思ひ煩ひを御手に任せて安心することが出來る。「さらば何を食ひ、何を



飲み、何を着んと思ひ煩ふな。先づ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡て此等の物は汝等に加へらるべし」(マタ六・三一、三三) 又「何事をも思ひ煩ふな、ただ事毎に祈をなし、願をなし、感謝して汝等の求を神に告げよ。さらば凡て人の思に過ぐる神の平安は、汝等の心と思とを基督耶蘇によりて守らん。」(ピリ四・六、七) などとあり。私共は一切萬事を神に任せて、大安心を樂み得るやうでなくてはならぬ。

重い荷物を負うて旅をする老人があつた。そこへ自動車に乗つて通りかかつた親切な一紳士があり、車を停めて老人に同乗せんことを勸めた。老人は喜び、自動車にはのせてもらうたが、矢張重い荷物を背に負うておろさない

故、紳士は、「お爺さん、其の荷物をおろしたが宜しいでせう」といふと。老人は答へて、「どう致しまして、すでに體をのせて戴いた上に、荷物までお世話になつては相濟みませんから、どうか此のままで」というたさうである。自動車の方から云へば、荷物を負うてゐようが、下においてあらうが、同じ目方である。老人が負うて居れば、その老人が疲勞こそすれ、自動車の方には何の益にもならないことを、老人は心付かなかつたものと見える。丁度其の如く、神は私共が氣のつかない前から、私共を守り、壽命を與へ、健康を與へ、食ふ物、飲む物を與へ、雨をふらせ、日を照して、今日まで助けて居給ふお方であるから、私共はつひでに、其の身も心も神に任せ奉り、い



らざる思ひ煩ひや、心配をやめて、そつくり其の御手に委ね奉るに如くはない。さうするなら神は私共の想像にも及ばぬほど、大きな愛と惠とを以て、萬事を最も宜しきに導き給ふのである。「汝の業をエホバに任せよ、さらば汝の謀る所必ず成るべし。」(箴一六・三)「又もろもろの心づかひを神に委ねよ、神汝等の爲におもんばかり給へばなり。」(ペテ前五・七)神に信頼する者の心には、いつも穏かな、樂しい、大なる平和が宿るものである。

昭和八年九月二十五日印刷
昭和八年十月一日發行
昭和十三年十月十五日三版

定價金五錢

東京市神田區神保町二丁目十七番地
編輯者　山室軍平

東京市神田區神保町二丁目十七番地
發行者　植村益藏

東京市京橋區京橋一丁目七番地
印刷所　寶屋印刷所

東京市神田區神保町二丁目十七番地
發行所　救世軍出版及供給部
（振替東京四四〇〇番）

不許複製

428
272

## 救世軍出版書類

| 書名 | 定價 | 送料 |
|---|---|---|
| 平民之福音 | 上並製 一二〇 | 三 |
| 人生の旅行 | 七五 | 六 |
| 聖書の人物 | 一五〇 | 六 |
| 使徒的宗教 | 一五〇 | 四 |
| 基督教講話 | 一七五 | 四 |
| 五十二文集 | 上並製 一五〇 | 四 |
| 靈魂の救 | 上並製 一五〇 | 四 |
| 聖潔とは何か | 五〇 | 六 |
| 聖潔之基督教 | 上並製 四五 | 六 |
| 實行的傳道訓 | 八〇 | 九 |
| 基督の生涯 | 四〇 | 六 |
| 新天の父に歸れ | 三〇 | 三 |
| 救靈者の祕訣 | 三〇 | 六 |
| 日常生活の宗教 | 二五 | 三 |
| 箇人傳道 | 二五 | 三 |
| 罪より救ふ力 | 二五 | 三 |
| 十字架の教 | 二五 | 三 |
| 心の清き者 | 二〇 | 三 |
| 禁酒のすゝめ | 二〇 | 三 |
| 禁酒と基督教 | 二〇 | 三 |
| 青年への警告 | 二〇 | 三 |
| 病床の慰安 | 一五 | 三 |
| 基督教と日本人 | 一〇 | 三 |
| 勞働の宗教的意義 | 一〇 | 三 |
| 聖書の感化力 | 一〇 | 三 |

東京神田神保町 救世軍出版及供給部 振替東京四四〇〇

終